

宮廷女房たちの環境・意識・視線
—『源氏物語』『阿仏の文』などから—

早稲田大学 田渕句美子

宮廷女房とは

宮廷女房は、天皇・院、女院、后妃、内親王などに仕える女房。

主君に近侍。主君の心身に関わるさまざまな世話・サポート・教育などを行う。

取り次ぎや代筆により、主君と外部とを繋ぐ。

側近の女房は、常に主君に近侍し、黒衣のように影となって寄り添う分身的存在。

宮廷の政治や動向を王権の深奥部から見、種々の情報を知る立場にある。

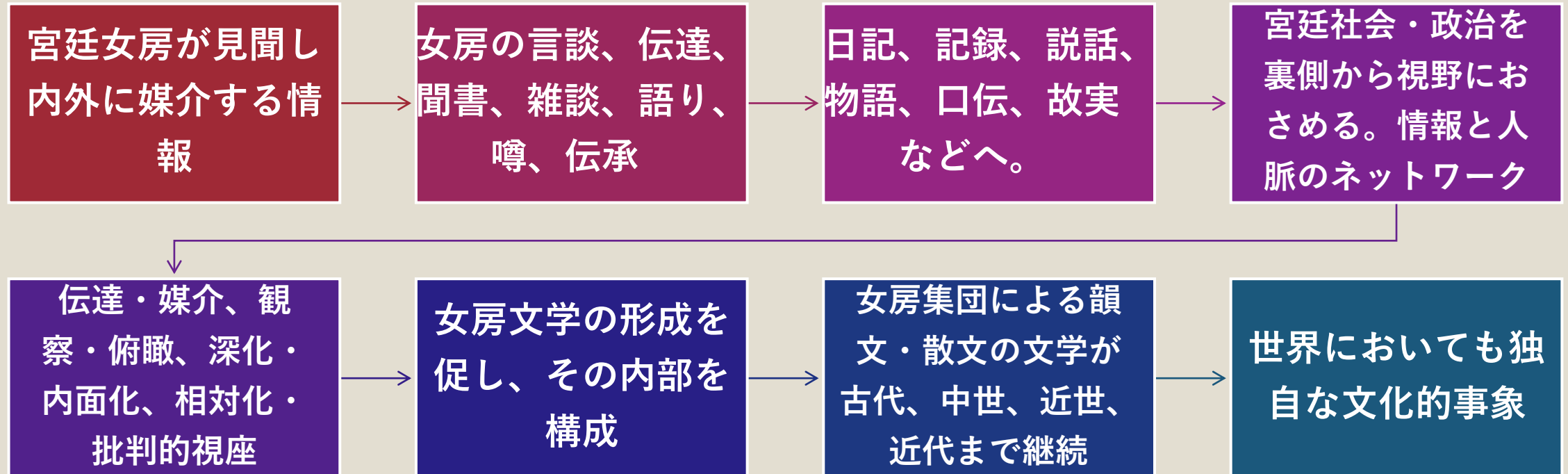
主君の真の意向を理解している。

時には女房自体が政治性を帯びた存在ともなる。

王権に密着し、その高貴性の反映を身に纏う。一方で、実体のない存在のようにも扱われる。



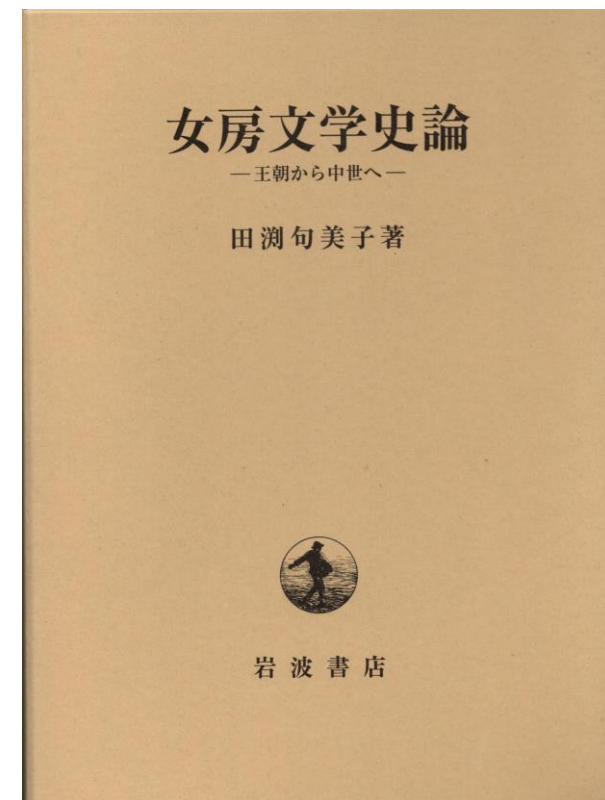
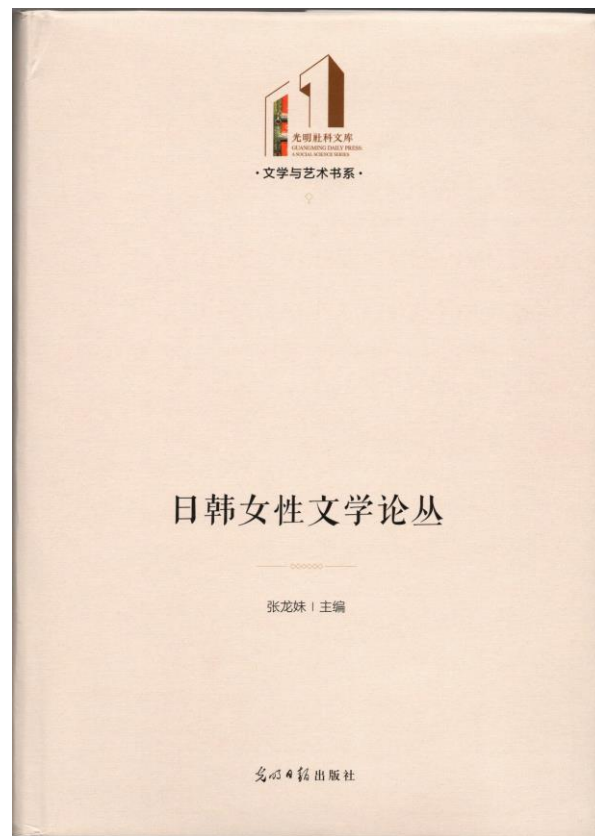
女房メディア

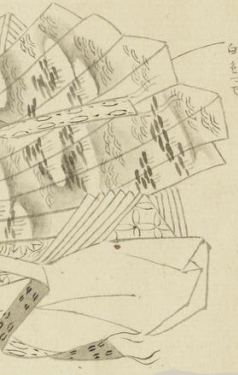


以上は、田淵句美子『女房文学史論—王朝から中世へ—』序章「女房文学史論の射程」（岩波書店、2019年）より抜粋。



この序章は馬如慧氏により中国語に訳されている。張龍妹氏主編『日韓女性文学論叢』（光明日報出版社、北京市、2022年）所収。





『女房三十六人歌合』（模本・CoI Baseより）

- 藤原為家の晩年の妻。女房歌人（勅撰集に計48首）。冷泉為相の母。冷泉家の祖とも。
- 長年にわたり断続的に安嘉門院邦子内親王に仕えた女房。女院女房の経験に基づく教訓を娘に伝えた。阿仏尼の姉妹も安嘉門院女房。

阿仏尼とは

⇒ 『阿仏の文』は女房の知の集積を吸収。

- 『うたたね』『十六夜日記』などを著す。
- 女性としてほぼ初めての歌論書『夜の鶴』執筆。
- 和歌史で初めて歌道家の女主人として歌壇で活躍。

『阿仏の文』とは

- 1264年頃に阿仏尼が娘に書いた教訓的な手紙
- 『乳母の文』『庭の訓』とも呼ばれる
- 宮廷女房として重要な心得を細々と述べている

平安期から中世の女房の存在形態や意識を語る
貴重な資料

- 娘は既に後深草院の女房（およそ13歳）
- 広本と略本がある。広本が阿仏尼の真作。
略本は後人による抄出本（岩佐美代子氏）
- 以降の女訓書に大きな影響を与えた
- 現代社会にも通じる内容。普遍的な人間洞察

『阿仏の文』広本

⇒阿仏尼の真作

①陽明文庫本(「阿ふつの文」。江戸初期頃写。国文研マイクロフィルム55・193・1。紙焼写真0927) 最古写本

②田渕蔵本(外題・内題なし。枡型本。寛文八年1668写) 冒頭部分⇒

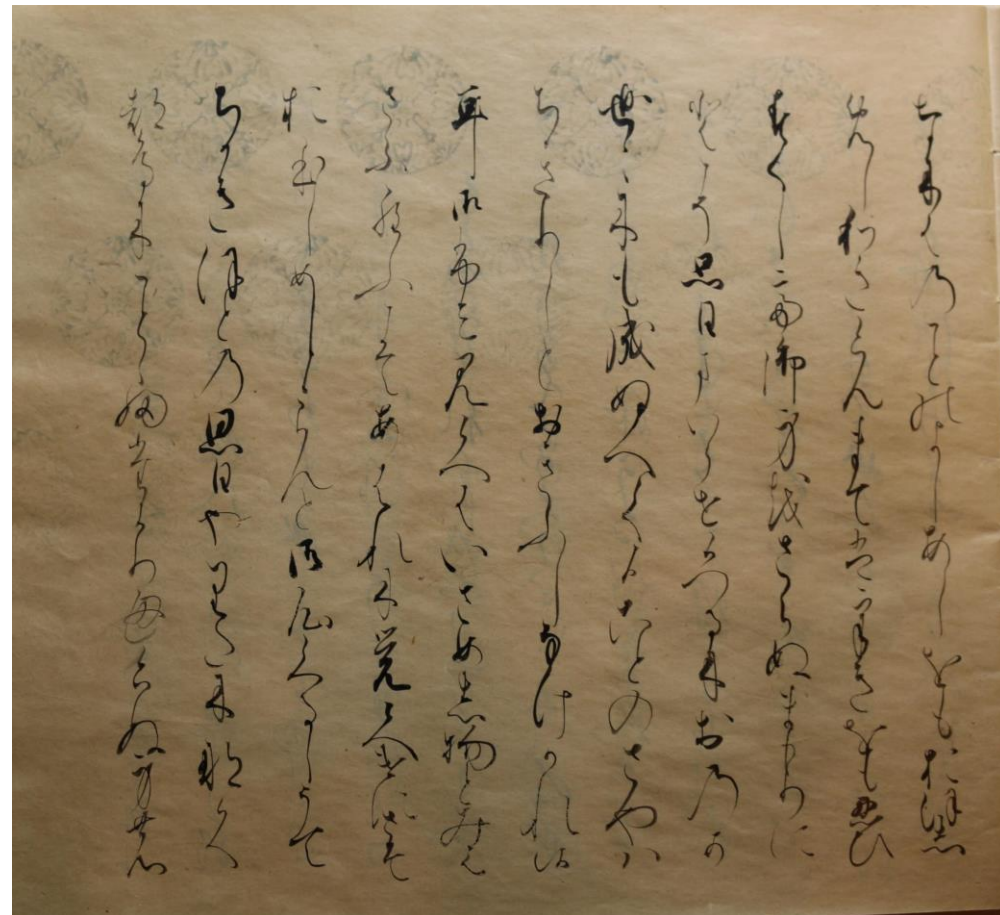
『阿仏の文〈乳母の文・庭の訓〉注釈』では田渕蔵本を底本として影印を掲載、他の三本を対校

③内閣文庫蔵本(「めのとの文」190・0251。天明元年1781写)

国立公文書館デジタルアーカイブで公開

④群書類従本(「乳母のふみ」)

国立国会図書館デジタルコレクション等で公開



『阿仏の文』略本

⇒後人の抄出本。多く流布

広本の事項を整理し、順序や表現などを変えて改編
諸芸や仏道等の教訓は残され、より実用的な手引き書に。
分量は広本の約三分の一程度

後続の女訓書・教育書に大きな影響

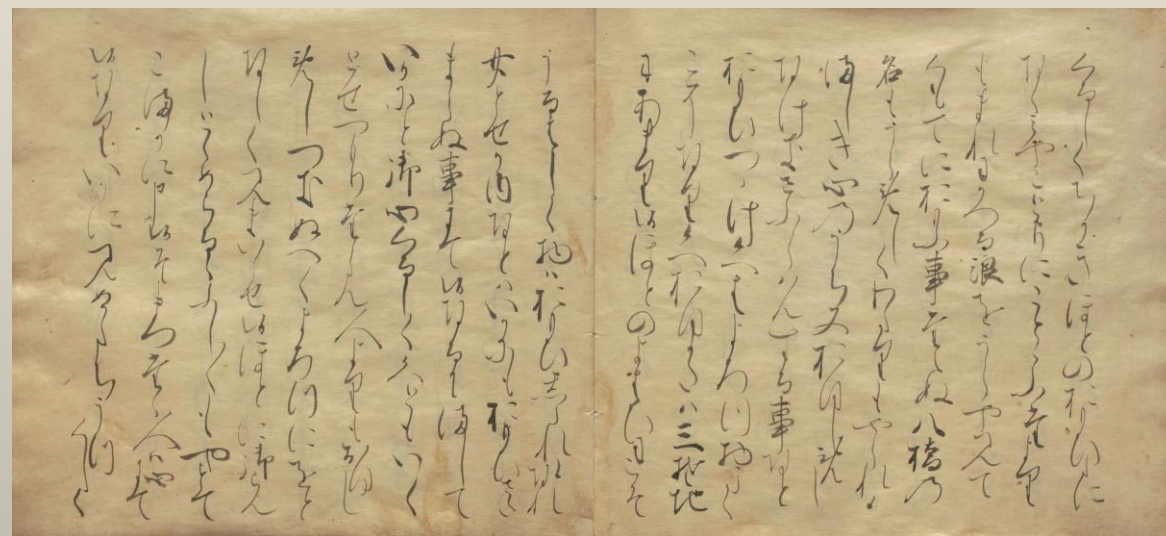
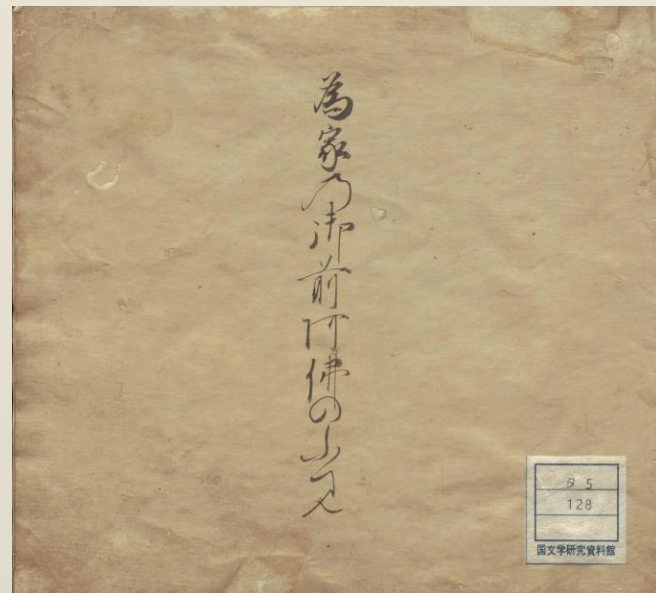
多くの伝本がある(女房奉書の書式ののものもある)

『扶桑拾葉集』などに「庭のをしへ」として入り刊行
伴蒿蹊による略本の注釈書『庭の訓抄』刊行

明治・大正・昭和にも実用書として用いられている

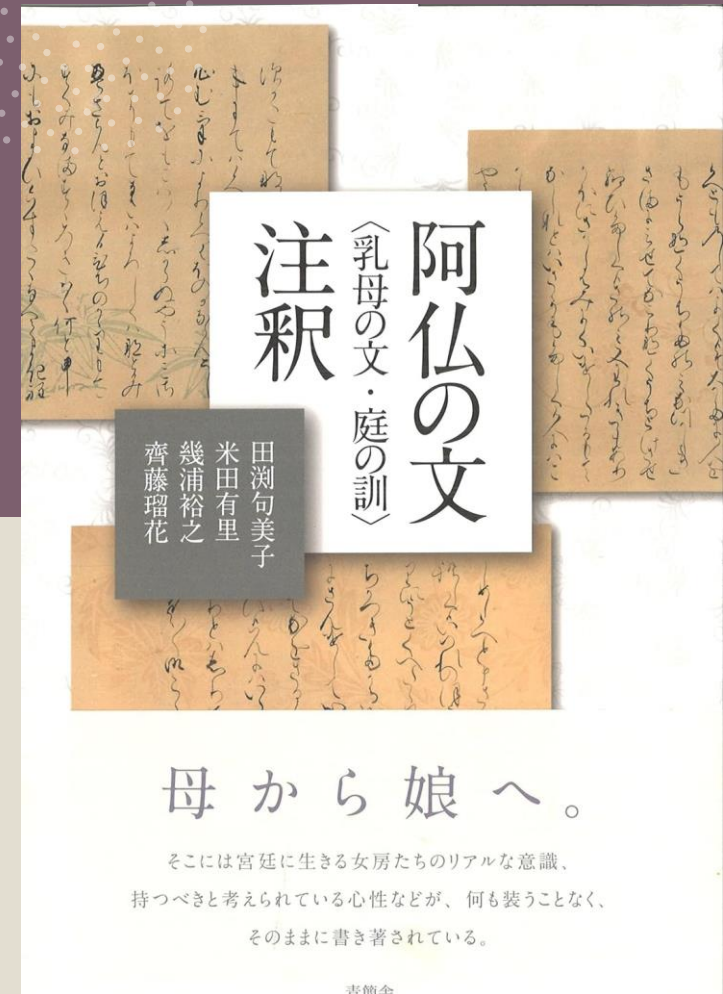
国文学研究資料館に略本の写本二点あり

うち一点が掲出のもの(内題「阿佛のふみ」)⇒



青簡舎
2023年9月

『阿仏の文』の注釈書



『阿仏の文』注釈

9

- (一) 序文 11
- (二) 心と言動の抑制——最も重要なこと 12
- (三) 人との距離の取り方——知人・侍女達に対して 16
- (四) 周囲の視線——すべて雅趣あるように 19
- (五) 薫物について——人柄を示すもの 20
- (六) 女房としての態度——応対する、侍女を育てる 21
- (七) 容姿と言動への心配り——軽薄を避けること 24
- (八) 和歌を詠むこと——女の歌 27
- (九) 書について——仮名と真名 30
- (一〇) 絵について——物語絵など 31
- (一一) 音楽について——箏の琴の才 33
- (一二) 物語・和歌を読む、覚える——熟読のすすめ 35
- (一三) 女房として認められるには——周囲からの評価 37
- (一四) 静かな風趣を好む、誠実に話す——調和の中で 40

5

- (二五) 愚かな親の願望——国母となる期待 43
- (二六) 夢が告げた将来——実現への期待と祈り 45
- (二七) 主君の寵愛をめぐって——さまざま言動 48
- (二八) 宮廷女房を辞した後——出家への途と零落への恐れ 53
- (二九) 仏道への帰依——聖、尼、宗 58
- (三〇) 人柄を見ること——そして娘の養育の回想へ 61
- (三一) 跋文 64
- 補注 68
- 現代語訳 106

影印・翻刻・校異

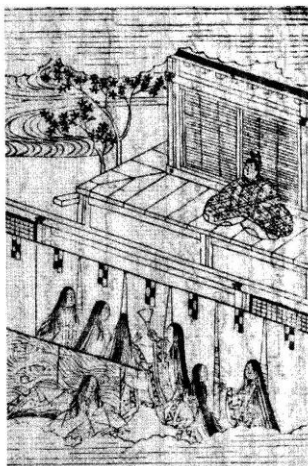
135

『阿仏の文』解説

213

- 一 はじめに 213
- 二 『阿仏の文』の概略・書名・伝本 215
- 三 阿仏尼の生涯と『阿仏の文』 217
- 四 『阿仏の文』の宛先である阿仏尼の娘 221

かに用意くはへて、御ふるまひ候へ。
 13 うちさうどき愛敬づき、にぎははしくなど、あるまじく候ふ。かく申し候へばとて、さるべき人の参りて候はんずるに、神さび、物遠くて、春日野の雪の朝、加茂の社の河なみなどおぼえたるやうには候ふまじく候ふ。ただ御もてなしばかりの、重りかに、あさはかならぬ筋のありたく候ふ。わざとも人をわかず、なつかしき御人さまにてありたく候ふ。18 人の際々をおぼしめしわくべく候ふ。
 19 人に向ひて、何の筋ともなき物がたりして、世継が世よりこの御代までの言葉も続かず、時代も知らぬいたづら物がたりなど、仰せられ候ふまじく候ふ。御簾の際ちかく居寄りて、「誰がかうむりの額つき、靴の音。」など申して笑ふ人の候はんに、ゆめゆめ言葉ませさせ給ひ候ふまじく候ふ。す

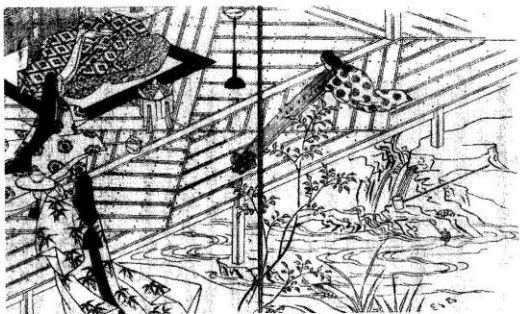


御簾の近くにいる女房たち
 (国文学研究資料館高乗敷文庫所蔵『狭衣物語』巻一下)

べて人の年のほどよりもおとなしく、おやすけたるがよく候ふ。人に異名つけなどして笑ひ、心知れるどち、目見あはせて、人のあまねく知らぬほどの事うち笑ひ、「そそや。」などささやきて、おのづから「なぞや。」など問ふ人あれば、「たださることの。」などとて、けしきばみたること、返々口惜しきことにて候ふなり。

10 底本「木丁」。几帳の端から見えてしまつたものを、美しく見えるように意識せよという注意。「御几帳のはづれ、けざやかに見えさせ給へる御髪のかかり」(『狭衣物語』四)など多し。
 11 女性の髪が垂れ下がった様子。その美しさの描写は物語に多く見られる。「御髪のかかり、はらはらときよらにて」(源氏物語「若菜巻下」)、小督の額のかかり、姿よそひなど、人よりはことに花々と見えしを「(たまきはる)」など。
 12 殊更に意を用いたというのではない、自然な様子。「わざとはなくて言ひつけさま、みやかによし、と聞き給ふ」(源氏物語「松風巻」)など。
 13 「うちさうどき」は陽気にはしやく。「愛敬づき」は魅力的な様子。「にぎははし」は快活で派手なさま。例えば「にぎははしう愛敬づき、をかしげなる」(源氏物語「空蝉巻」)の様子。軒端状を源氏は「あはつけし」と思い、肯定的ではない。
 14 以下、しかるべき身分の人が参上した時に、女房として応対する際の注意。
 15 神々しいような様子で、近づき難いさま。
 16 以下の二つは「神さび、物遠くて」のたとえとして言う。↓補注⑥
 17 底本はかの「河かみ」を群本により「河なみ」と校訂。↓補注⑦
 18 ここまでの叙述において、宮廷女性として理想的な立ち居振る舞いを語っている。↓補注⑧
 19 応対する人の身分・家柄。誠実に応対する一方で、女房としてこれに配慮するのは当然である。

20 「世継」は、『栄花物語』や仮名の歴史書一般をさす。「世継が代」は王朝時代。↓補注⑨
 21 群本「仰せらる、ことあるまじく候」とあるが、校訂はせざ底本のままとする。
 22 女房が御簾のすぐ内側において、外を見ながら噂話などをすることは、声は御簾の外に聞こえるので、大変はしたない行為である。↓補注⑩
 23 「かうむり」は「かうぶり」と同じ。冠、衣冠束帯装束のとき、頭にかぶるもの。「身のかたみ」に、「殿上の男などに心をかけて、かれがかうぶり、靴の音聞こえんに、あひかまへてこと加へさせ給ふな」とあり、これも同様の注意である。
 24 額の様子。物語・日記などで、容貌の描写によくある表現。「簾などもいと白う涼しげなるに、をかき額つきの透き影あまた見えてのぞく」(『源氏物語』夕顔)のように、簾ごしでも「額つき」のシルエットは見える。ここでは男子の冠や立烏帽子をかぶる額部分をさす。↓補注⑪
 25 年齢的には子供に近いが、態度が大人びていることを評価する言葉。「年の程よりはいとおとなしく心にくき様して」(『紫式部日記』)など。
 26 人につけるあだ名・ニックネーム。たとえば「落窪物語」で姫君を「落窪の君」、兵部の少を「面白駒」と人々が呼ぶ例など。当時も多かったとみられる。



院の御前で演奏する娘 (国文学研究資料館所蔵『庭の調抄』)

なるまで御器量さどく、「いみじき人々にも、劣るまじく。」など褒められさせおはしまし候ひしに、七つにて御今参りの夜、院の御前にて「弾かせおはしまし、又八の御年とおぼえ候ふに、春宮の御琵琶に引き合はせまゐらせなど、名をあげさせ給ひ候ひし御ことにて候へば、いかにも励ませ給ひて、上手の名をも得ん、とおぼしめし候へ。

用いられたが、貴族文化の衰退とともに次第に衰え、今は神事などで演奏されるのみ。和琴は決まった奏法がなく、ほかの楽器の音や拍子に調和させ、柔軟に演奏できる点を特徴とする。
 4 「物の音」は楽器の音、あるいは音楽。
 5 「しやう(さう・さふ)の琴」は、中国渡来の箏の琴。十三絃。古くは「箏の琴」と言われて和琴や琴(きん)の琴と区別したが、やがて単に「琴」といえば「箏」についてののみうようになった。
 一八〇cm前後の胴の上に弦を張り、琴柱(こしら)で音階を調節し、指にはめた爪(つめ)を用いて演奏する。
 6 阿仏の娘が、七歳で宮中(天皇は後深草)に初出仕したことを述べている。正嘉元年(一二五七)二年かと推定されている。「院」は後醍醐院。↓補注①
 7 底本はか欠脱。群本により補った。
 8 春宮(東宮)はのちの亀山院で、合奏の時は十歳。この記述は、亀山院が立坊し踐祚するまでの、正嘉二年(一二五八)から翌年の正元元年のことと推定されている。↓補注②

「一」序文

難波の葦ではありませんが、あなたが物事の良し悪しについてもよくおわかりになるまでは、つらいことも知らぬ顔で耐え過ごして、あなたから離れずにお守りしようと、ずっと思つてまいりました。けれども(今)、私達がそれぞれ別の生活に別れていくような状況となり、「私達は」そのような縁だったのだろうか、いやそんなことはないのに。」と、寝ても覚めても悲しく思われておりました。(そこへ)あなたが私に下さった手紙を読みましたところ、「いさめし物」(お母様はいつも私を諫めてくださったのに、和泉式部の歌にあるように、誰も諫めてくれなくなってしまふのうか)と(お手紙の中に)あるのに、心を打たれました。

(あなたは)まことにそのようにお思ひになつてゐるのだらうと、おいたわしくてなりません。近くで(あなたのことを)思いやることさえできず、都鳥に(宮中のあなたの様子を)聞く手立てもない私は、(都に)帰る波ばかりが羨ましく、(蜘蛛手のように)あれこれ心配して思うことが絶えずに、(その歌の)八橋の名も恨めしく思われて、(私は嗟嘆へ)移つてしまふことができそうもないと心の中で思われて、(あなたも)またそう思つて深く嘆いていらつしやるであらうご様子などを、思い続けておりますので、大層つらい気持ちです。一般に(人というものは)たしかに、三十歳を超えてから、明確に物事の道理が分別されるものでございます。二十歳になるまではやはり思慮が定まらないようでございますので、ましてあなたは(とてもお若いのですから)どれほど(ご不安のこと)か、気がかりでございますが、何

歳も(あなたより)年をとつてゐるような人よりも、(あなたは)大人っぽく落ち着いていらつしやると(いつも)拝見しておりますから、何でも理解なさり分別なさることもあるかと思つて(書くこの手紙を)、ご覧になつてお心に留める所もあろうかと考えて、細かに申し上げるのでございます。

「二」心と言動の抑制——最も重要なこと

かわいらしく美しい人で、その容姿や、能力が、世に並びなく(優れて)いまして、心が落ち着いていないなどのことがございましたら、無意味なことでございます。(ですから)十分に注意なさつて、どれほど心の中で切望なさることがあつても、(それを)知らず知らずのうちに人も漏れ聞いて、とがめて非難するようなことは、(人に言うことなく)御心の中だけで抑制して、その思いをお忘れになつてしまいなさい。

心のまま(にふるまうの)が、何と言つてもとても悪いことでございます。たとえ、人の(あなたへのふるまいが)とても薄情で思いやりのないことがありまして、(あなたの)表情に現れて人に(それと)分かるのは、きつときまりが悪いことだと思ひになつて、素知らぬ顔でありながら、それでもやはり、薄情だと思いつつ、口数少ないようにして、(その人に)待遇しておきなさいませ。

又嬉しく御心の意にかなうようなことがありまして、口に出して「嬉しいわ、ありがたいわ。」などとおつしやることは、あつてはなりません。つらいことも、耐えられないことも、嬉しいことも、御心の中でよく分別なさいませば、(それが人にも)わかるものですよ。又、ほかの人の心のうちにあることなどを、「このようなことがありましたのよ。」「こんな心持ちになりました。」などと(別の)人におつしやつて、噂話などをすることは、あつてはなりま

『阿仏の文』の内容

→ 宮廷に生きる女房の心構え・行動規範



- 自己を抑制する態度の重要性（繰り返し語られている）
- 宮廷社会の人間関係におけるさまざまな注意。特に同僚女房たちや侍女たちとの関わり方
- 女房の基本的職務・持つべき態度
- 女房として身につけるべき諸芸・教養。風雅に対する考え方
- もし主君（この場合は後深草院）に寵愛される女房（愛人の女房）となった時の振る舞いについて
- 養育時などの回想など（阿仏母子が困窮した過去の描写もある）
- 宮廷女房から退く時の心構え、そして出家後の心得

『阿仏の文』の資料的価値

- 中世女房たちのありのままの思念、生活、一生が凝縮されている
- 実際に宮廷女房であった岩佐美代子氏によって、広本が阿仏尼の真作であることが立証された⇒重要
- 後世の女訓書によくみられる、説話・故事等を例示して教訓する書物ではない。また儒教的道徳的な言説は見られない。
- 作法書・礼法書ではない。また一般女性への啓蒙書ではない。

女房という存在、その環境や意識を浮かび上がらせる資料。

中世はもちろん、平安期の物語や日記を読む時にも有益

『阿仏の文』から物語・日記を読み直す

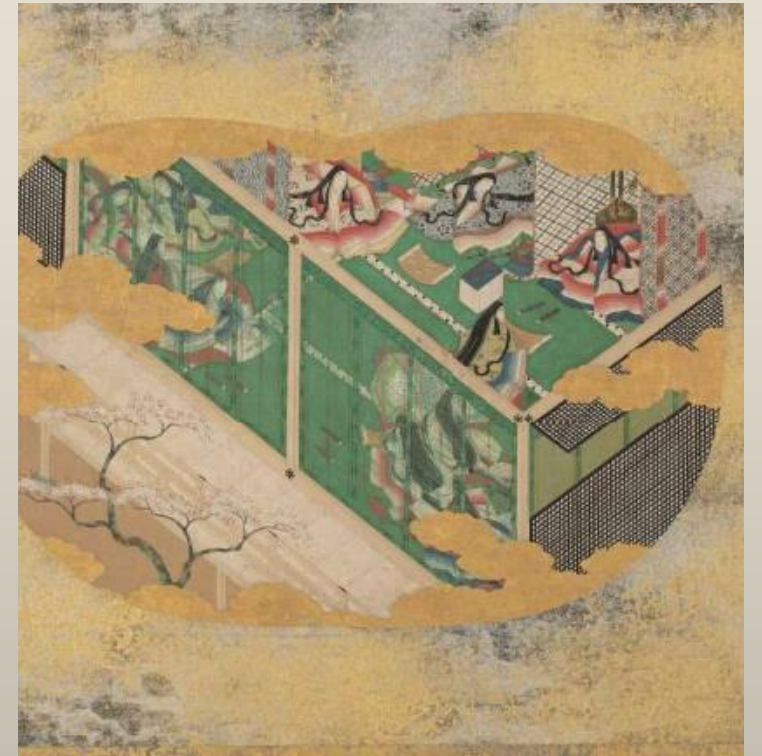
『古今集』『伊勢物語』『源氏物語』など→『阿仏の文』
表現を享受・踏襲（一般的な古典の受容）多い

『阿仏の文』→『源氏物語』『紫式部日記』などの日記・
物語へ

女房の基本的心性などから、『源氏物語』や女房日記
などを再考する手掛かりになる。

女房たちが置かれていた現実を、より明視できる。

作品の読みを変える可能性もある。



国文研蔵『源氏物語』⇒

I 信頼される女房 (『源氏物語』『阿仏の文』)

『源氏物語』蜻蛉卷

薫と小宰相

大将殿の、からうして、いと忍びて語らはせたまふ小宰相の君といふ人の、かたちなどもきよげなり、心ばせある方の人とおぼされたり。同じ琴を掻きならす爪おと、撥おとも人にはまさり、文を書き、ものうち言ひたるも、よしあるふしをなむ添へたりける。……

いともものはかなき住まひなりかし。局などいひて、せばくほどなき遣戸口に寄りゐたまへる、かたはらいたくおぼゆれど、さすがにあまり卑下してもあらで、いとよきほどにもものなとも聞こゆ。見し人よりも、これは心にくきけ添ひてもあるかな。なとて、かく出で立ちけん。さるものにて我も置いたらましものを」とおぼす。

▼小宰相の君は女一宮の女房。出自等不明。上流貴族の娘ではないと思われるが、嗜みある女房。明石中宮から、まめ人の、さすがに心に心とどめて物語すること、心地おくれたらむ人は苦しけれ。心のほども見ゆらむかし。小宰相などはいとうしろやすし」と評価されている。
蜻蛉卷。

『阿仏の文』第一三段

同じ宮仕へをして、人に立ちまじり候へども、我が身の器量に従ひて、畏き君にもおぼしめしゆるされ、かたへの人にも所置かるる物にて候ふ。……

見目かたちもさることにて、まめやかに、人は心おきてなだらかに、能など候へば、上にも、さる方の目安き物に思はれ参らせ、……。さる方にて、たよりなげに人笑はれなるべきまじらひのさまなれど、ゆるさるる方ありて、人々しき数に入ることにて候ふ。

II 親没後の零落の危惧 『源氏物語』『阿仏の文』『とはずがたり』

■ 『源氏物語』 椎本卷 父の言葉

おとなびたる人々召し出て、「にぎははしく人数めかむと思ふとも、その心にもかなふまじき世とならば、ゆめゆめかろがるしくよからぬ方にもてなきこゆな」などのたまふ。

■ 『阿仏の文』 第一八段 母の言葉

夢の世、など申しなして、心もちる浅々しき人の、何事もしかるべきこと。」と申して、よからぬ筋には軽らかに、物に心得たるさまして、身をやすらかにもてなし、品おくれたる窓のうちにも、にぎははしくてだにかしづきすゑられ候へば、心に憂ふることなくでありなんかし。」など申しなすことにて候ふ。ゆめゆめその御心づかひ候ふまじく候ふ。さやうに物を思ひ始め候ひぬれば、落ちぶれ、身をもてはふらかし候ふぞ。

物語りにつけたるしるべ、もしはさぶらふ古御達の中にも、あな心苦しの御ありさまや。かくてはいかが過ぐさせ給はんぞ。かれはいづくにおはしましてこそ、かしこきことはあなれ。……」など申し聞かせ、誘ひまゐらせ候ふ人候ふとも、なびかせ給ひ候ふな。

■ 『とはずがたり』 父の言葉

「……世に捨てられ、便りなしとて、また異君にも仕へもしはいかなる人の家にも立ち寄りて、世に住むわざをせば、亡き跡なりとも、不孝の身と思ふべし。夫妻のことにおきては、この世のみならぬことなれば、力なし。それも、髪をつけて好色の家に名を残しなどせむことは、かへすがへす憂かるべし。……」

Ⅲ 離れがちな夫への態度 (『源氏物語』)

■ 『源氏物語』 帚木卷

頭中將が常夏の女(夕顔)について語る場面

……さばかりになればうち頼めるけしきも見えき。頼むにつけては恨めしと思ふ事もあらむと、心ながらおぼゆるをりをりも侍りしを、見知らぬやうにて、久しき途絶えをも、かうたまさかなる人とも思ひたらず、ただ朝夕にもてつけたらむありさまに見えて心苦しかりしかば、頼めわたる事などもありきかし。親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそはとことにふれて思へるさまもらうたげなりき。かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりしころ、……思ひ出でしままにまかりたりしかば、例のうらもなきものから、いとも思ひ顔にて……

うちはらふ袖も露けき常夏に

あらし吹きそふ秋も来にけり

とはかなげに言ひなして、まめまめしく恨みたるさまも見えず、涙を漏らし落として、いと恥づかしくつつましげに紛らはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむは、わりなく苦しきものと思ひたりしかば、心やすく、また途絶えおき侍りしほどに、跡もなくこそかき消ちて失せにしか。

主君の愛人となった女房が持つべき態度（『阿仏の文』）

■『阿仏の文』第十七段

はじめよりあながちに映え映えしき御覚えならずとも、心もちるおだしくて、人と争ひそねむ気配なう、ほけらかにもてなして、さる並にても交じらひぬべからんほどは、よろづを知らず顔に、うらなくらうたきさまして、さる物から、身のありさまは、深く思ひ入れたるやうに、うちとけみだれ心ゆるびたる気色など御覧ぜられず、ことのつまごとには、物思はしきを思ひ入れず、うちまぎらはすほどと覚えて、さるべき折々の御答へは、さやかならぬ物から、うちかすめて、詞多く長々とこと続けぬやうに、思ひ知りけりとは、さすがに色見ゆる体に、何のあはれをも思ひ知りたる色見えで、あはれなるべきふしも思ひひとめず、そこはかとなき身のほどにて。」など、ほのかにほのめかせ給ふとも、言に出でて顔の色変はり物恨めしげなる色あらはさず、人笑はれに、本意なきことありとも、心のうち深くしづめて、数なるまじき身の、猶かくても交じらふこそ、めやすからめ。」などおぼしめて、上の女房達などにも、身のありさまをかきくづし、本意なう思はずなるよし、露ばかりも仰せられ候ふべからず。

あやまりて 本意なきことかな。」など申し候はん人候ふとも、何かは。人々しく、その数におぼしめさるべきにもあらず。しひて心のみこそ。」など、詞すくなにてわたらせ給ひ候へ。……

・『阿仏の文』がなければ、『源氏物語』の夕顔のはかなく控えめな態度は、物語の人物造型として、夕顔の独自の個性を表現するもののように見える。

・女三宮との結婚を光源氏から告げられた後の紫上の態度は、紫上の気高さやその苦悩の深さに帰せられることが多い。



『阿仏の文』と読み合わせることによって、現実の宮廷社会に生きる女性たち、ここでは、貴顕の愛人の女房がいつ寵愛を失うかもしれないという不安に怯え、あるいは実家などの後見を持たない女性が、夫が今自分から離れていくかもしれないという怖ろしい苦悩に向き合う時、その時の現実的な対処として抑制的なふるまいが必要であり、外側からだけでなく女性達がそれを内面化しているありようが、…具体的に浮き彫りになる。

▼田渕句美子「『阿仏の文』から『源氏物語』へ」(盛田帝子氏編『古典の再生』文学通信、二〇二四年)より

IV 女主人とその女房たち 緊張をはらむ関係（『源氏物語』）

■ 『源氏物語』 竹河卷

大君が女房（中将）に、この返歌を代筆して送りなさいと指示したのに、女房が恐らく意図的に、大君直筆の返歌をそのまま蔵人少将に送つてしまう場面。

蔵人の君、例の人にいみじき言葉を尽くして、今は限りと思ひはべる命の、さすがに悲しきを、あはれと思ふ、とばかりだに一言のたまはせば、それにかけてどめられて、しばしもながらへやせん」などあるを、持て参りて見れば、……限りとあるを、まことにや、と思して、やがてこの御文の端に、

「あはれてふ常ならぬ世の一言もいかなる人にかくる物ぞは

ゆゆしき方にてなん、ほのかに思ひ知りたる」と書きたまひて、かう言ひやれかし」とのたまふを、やがてたてまつれたるを、限りなうめづらしきにも、折思しとむるさへいとど涙もとどまらず。……

「つたてもいらへをしてけるかな。書きかへでやりつらむよ」と苦しげにおぼして、ものものたまはずなりぬ。

▼大君 髭黒と玉鬘の娘。冷泉院に入内」と蔵人少将 夕霧の子」の贈答



（国文研蔵『源氏物語』画帖より）

『源氏物語』総角卷

例のやうに聞こえむ」と、また御消息あるに、心あやまりして、わづらはしくおぼゆれば、とかく聞こえすまひて対面したまはず。……

怨みわびて、例の人召して、よろづにのたまふ。世に知らぬ心細さの慰めには、この君をのみ頼みきこえたる人びとなれば、思ひにかなひたまひて、世の常の住みかに移ろひなどしたまはむを、いとめでたかるべきことに言ひ合はせて、「ただ入れたてまつらむ」と、皆語らひ合はせけり。

姫宮、そのけしきをば深く見知りたまはねど、「かくとりわきて人めかしなつけたまふめるに、うちとけて、うしろめたき心もやあらむ、昔物語にも、心もてやは、とあることもかかることもあめる、うちとくまじき人の心にこそあめれ」と思ひ寄りたまひて、……

▼「ともかく薫を大君の部屋に入れてしまおうと女房たちが相談する。大君はそうした女房たちを警戒。」

『阿仏の文』第二〇段

朝夕そはせ給ひ候はん人にも、心の際みえて、「あら興ざめ」など思はるる体の御ふるまひ、あるまじく候ふ中々よその人は、「さのみ入りちてのことを、いかでか知り候はん。身に近く目をもならべたる人、召し使ふ物どもなどの、見まゐらせ候はん事は、みな世に散らするとおぼしめし候へ。」

「うときが物をもらすことのやうに、これは我がうちの物なれば、よも言ひ散らさじ。」とて、「をこがましきことは出で来候ふなり。……」

▼「侍女達が見ることはすべて世間に知られてしまうのだ、よく注意せよと教訓。」

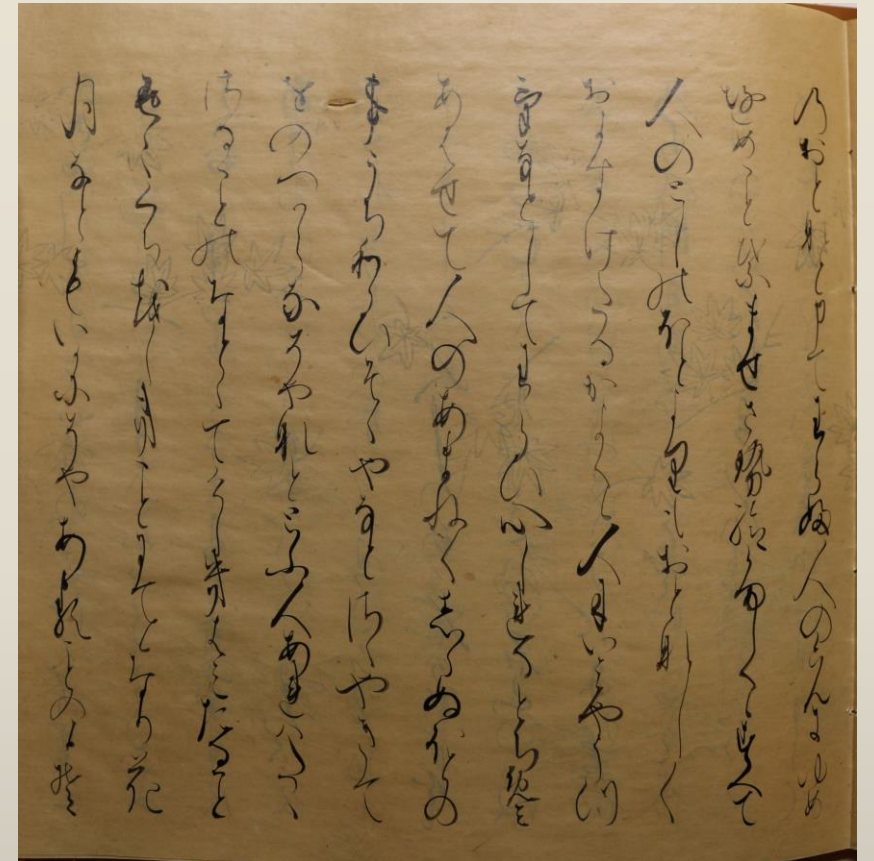
『阿仏の文』の文学史的価値

- 著者・成立年代・宛先・背景が明確
 - ⇒ 女院女房阿仏尼による鎌倉中期の資料
- 娘への教訓の手紙 ⇒ 現実的で率直な記述
- 阿仏尼は為家との結婚前
 - ⇒ 一般的な女房の風雅・和歌などへの意識

『源氏物語』など女房文学全般と連関

その内容を相対化するもの

作品の読みや位置づけを一新させるような可能性



『阿仏の文』広本(田泷蔵)

教訓書・女訓書・教育書として

- ・『阿仏の文』以前には、女房が直接誰かに教訓・説諭する書物は現存していない

- ・『源氏物語』の教訓的語りの部分、『紫式部日記』消息部分、『十訓抄』ほかの説話集、『健御前日記』『とはずがたり』などの日記その他の諸作品中の教訓的部分、男性による家訓・消息などとも内容的に重なるところがある

⇒教訓・教育的テキスト、及びその注釈などは、その時代の価値観・要請・制約・ジェンダー性などを鏡のように映し出す

⇒興味深い文化史研究。通史的・縦断的・横断的・学際的・国際的な研究望まれる

『阿仏の文』から現在へ

- 名も無い、姿の見えない、黒衣のような女房たちの姿・声・意識を、今に伝えてくれる資料
- 女房による肉声そのもの。視線を語っている。
内面から、裏側からの叙述。
一種の日記・ドキュメンタリーのようなでもある
- 『源氏物語』から『阿仏の文』まで約200年。
『阿仏の文』から現在まで約800年。

⇒繋ぐものとしての『阿仏の文』

国文研蔵『源氏物語』野分巻⇒



眼差し、視線をめぐって

『源氏物語』作者の女房集団は藤原道長・彰子に仕える女房たち。

道長という権力者が後援して成った『源氏物語』は、当初から宮廷の人々を読者に想定。



この物語は、権力者の眼差し、貴族男性たちの眼差しに沿った形で、彼らが渴望する権力・好色・富・救済などをふまえて、物語を展開し表現しなければならない面があった。

けれどもそこには必然的に作者の女性たちの眼差しが入り込み、混淆。

男が女を見る時の眼差しに潜むものに、作者である現実の女房たちの眼差しが注がれ、それが物語の言葉、物語の和歌になっていく。



光源氏が若紫や玉鬢を見る時の眼差しに潜在する傲り、欲望、支配感などを、作者の女房たちの眼差しが相対化。その落差や矛盾が『源氏物語』の複雑な語りを形成。『源氏物語』の魅力のひとつ。

▼田渕句美子「『源氏物語』の和歌があらわにする傲り—その眼差しと逸脱が意味するもの—」(『『源氏物語』創成と記憶—平安から江戸まで—』花鳥社、2024年)

参考文献

『女房文学史論—王朝から中世へ—』田渕句美子著（岩波書店、2019年）

『日韓女性文学論叢』（張龍妹主編、光明日報出版社、北京市、2022年）

『阿仏の文〈乳母の文・庭の訓〉注釈』（青簡舎、2023年）

田渕句美子・米田有里・幾浦裕之・齋藤瑠花著

「『阿仏の文』から『源氏物語』へ」田渕句美子

（盛田帝子編『古典の再生』所収、文学通信、2024年）

「『源氏物語』の和歌があらわにする傲り—その眼差しと逸脱が意味するもの」田渕句美子

（渡邊裕美子・田渕句美子編『『源氏物語』創成と記憶—平安から江戸まで』

所収、花鳥社、2024年）

「女房が語る「家」の物語と歴史—『源氏物語』竹河巻—」田渕句美子

（寺田澄江・田渕句美子・新美哲彦編『源氏物語 フィクションと歴史』所収、

青簡舎、2024年）

参考文献（続き）

『宮廷女流文学読解考 中世編』岩佐美代子著（笠間書院、1999年）

「柀型本『阿仏の文』（広本）解題・翻刻」幾浦裕之

（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』25-1 2017年9月）

⇒田渕蔵本（柀型本）の翻刻を収めている

『阿仏尼』田渕句美子著（吉川弘文館、人物叢書、2009年）

『十六夜日記白描淡彩絵入写本・阿仏の文』田渕句美子著（勉誠出版、2009年）

⇒国文学研究資料館蔵略本の『阿仏の文』の影印・翻刻を収めている

Christina Laffin *Rewriting Medieval Japanese Women: Politics, Personality, and Literary Production in the Life of Nun Abutsu* (University of Hawai'i Press, 2013)

Carolina Negri *Tra corte, casa e monastero La vita di una donna nel Giappone del Medioevo* (Universita Ca' Foscari Venezia, 2021)